



Two-step egg introduction for prevention of egg allergy in high-risk infants with eczema (PETIT): a randomised, double-blind, placebo-controlled trial

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-01-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏目, 統 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3213

論文審査の結果の要旨

本研究は、卵アレルギー発症に対する卵摂取の予防的効果を検討したものである。歴史的に 2000 年前後では、食物アレルギーは腸管で感作されるために誘導されると考えられた。従って卵アレルギーの発症予防のために、卵は 2 歳まで食物から除去した方がよいと言われた。しかしコホート研究などにより、乳児期早期から摂取を開始した方が、食物アレルギーの発症を予防できることが示唆された。そこで申請者は、卵摂取の二重盲検ランダム化並行群間比較試験を行い、卵アレルギーの発症を検証した。

アトピー性皮膚炎乳児を対象とし、生後 6 か月からの鶏卵摂取群と生後 12 か月までの鶏卵除去群において、卵アレルギーの発症頻度を比較した。生後 6 から 9 か月はゆで卵 0.2g 分の卵粉末、生後 9 から 12 か月はゆで卵 1.1g 分の卵粉末というごく少量の卵を毎日摂取した。対照群はプラセボ粉末を摂取した。主要評価項目は、生後 12 か月時に行った卵負荷試験での陽性率とした。結果、卵アレルギーの発症率は卵群で 5/60 人、プラセボ群で 23/61 人と有意な差 ($P=0.0001$) を認めた。また、卵摂取によるアレルギー反応などの有害事象は、プラセボ群と比較し有意な差は認めなかった。0.2g 分という極少量の卵であれば参加者全員が有害事象なく摂取開始でき、また 1.1g 分という少量の卵を摂取継続していれば卵アレルギーの発症が予防されたことは強調されてよい。海外の研究では、大量に卵を摂取して発症を予防しようとした余り、摂取時にアレルギー症状が誘発されてしまい、実用性が低い結果となっている。それに対し本研究では、参加時にすでに卵特異的 IgE が陽性になっている乳児でさえ、アレルギー症状を誘発することなく卵アレルギーの発症を減少させた。本研究の結果は、今後の食物アレルギー発症の予防方法に大きな示唆を与える重要な知見であり、臨床的に意義深いと考えた。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 戸倉 新樹

副査 峯田 周幸

副査 渡邊 裕司